

王である祭司キリスト——贖いの二側面

水草修治

序 義認は贖いと密接不可分であり、贖いは、聖書が約束する至福とやはり密接不可分である。そこで、まず聖書が約束する至福とは何かを簡潔に明示し、1章で贖いの教理を扱い、2章で伝統的義認理解とNPPの義認理解を扱い、3章で聖書は救いの歴史全体の中で贖いと義認をどう位置付けているかを、おもにローマ書から明らかにしたい。

聖書のいう救いとは、神なき状態から「わたしはあなたの神となり、あなたはわたしの民（子）となる」ということ、即ち、インマヌエルという至福の実現であることは、創造から新天新地へと貫かれた契約の主題がそれであることから明白である¹。神は、主の園にあったインマヌエルの祝福を回復し、さらにそれを完成するために契約をお与えになった。アブラハム契約²、シナイ契約³、ダビデ契約⁴においてインマヌエルの約束は首尾一貫しており、キリストの初臨において世界大に拡張されて成就し、その究極的成就是再臨と新天新地の出現による⁵。新しいエルサレムが天下るとき、玉座から「神は人々とともに住み、

¹『聖書神学事典』（いのちのことば社、2010年）「救い」の項（水草修治）参照。

²創世 17:7b 「わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。」

³出エジプト 6:7a 「わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。」

⁴2サムエル 7:14a 「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」

⁵O.P. Robertson, *The Christ of the Covenants* (Presbyterian & Reformed Pub Co., 1980) および、拙稿「諸契約の成就者キリスト」参照。 https://docs.wixstatic.com/ugd/2a2fcb_0d393516bd2b4574a3b48a9718acd04a.pdf

人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」(黙示 21:3) ⁶ という声が響く。

最初に、人は「神のかたち」である御子に似た者として造られ⁷、世界の相続者としてこれを統治する任務を与えられた。だがその時、人は「罪を犯しえない罪なき」完成態ではなく、「罪を犯しうる罪なき」未発達な状態⁸であった。アダムは蛇に潜む悪魔の誘惑に屈して、神に反逆して法的に有罪となり、御子との類似性を毀損して悪魔に隷属し⁹、被造物は虚無に服した¹⁰。そこで、あの至福の実現のためには、罪と悪魔の問題を解決する必要性が生じた。そのためには、選びの民の罪を償って神との交わりを回復し、かつ、彼らを悪魔の圧制から神の支配へと移して臣民として被造物を統治させねばならない。神は人の墮落直後、二つの様態で贖い主を啓示された。一つは、蛇の頭を踏み砕く「女のすえ」であり¹¹、もう一つは、神が獣の血を流して作ってくださった皮衣に象徴される罪を覆うお方である¹²。人も動物も草食で¹³動物が殺されたことがなかった当時、人が罪深い裸の恥を覆うために作ったイチジクの葉の腰覆いに代えて、主が動物の血を流して作った皮衣の意義が、恥を覆うための犠牲であることは明白だった。

⁶ 本論の聖書引用は、特に断りのない限り、『新改訳 2017』からのものである。

⁷ コロサイ 1:15、オリゲネス「創世記講話」(小高毅訳)『中世思想原典集成 1 初期ギリシャ教父』(平凡社、1995 年) 518 頁、エイレナイオス「使徒たちの使信の説明」22『中世思想原典集成 1 初期ギリシャ教父』(平凡社、1995 年) 参照。

⁸ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』12 参照。

⁹ エペソ 2:1,2

¹⁰ 創世 3:17,18; ローマ 8:20-22 参照。

¹¹ 創世 3:15

¹² 創世 3:21。この説は保守的な註解者に支持されている(M. Henry, Keil and Delitzsch, A. Barnes, J. Benson, A. Clarke, C. J. Ellicott, J. Gill, R. Hawker など)。この衣のモチーフは、祭司の衣(出エジプト 28:40-42)、王子の婚宴に用意された衣(マタイ 22:11-13)、「キリストを着る」(ローマ 13:14)という表現へと展開して行く。

¹³ 創世 1:29,30

1. 義認の前提としての贖いの教理

G. アウレンは、贖いの教理を古典的モチーフ、ラテン型、倫理型と三分類した。ギリシャ教父の古典的モチーフではキリストは悪魔の征服者である。ラテン型はアンセルムスによるもので、神を満足させるものなので満足説と呼ばれ、改革者の刑罰代理説もこれに含まれる。倫理型とは、中世のアベラール、近世のソツツィーニ、近代自由主義神学の説で、神との和解はキリストの愛に感動して人間の内側に生じることを根拠とするので主観説・道徳的感化説とも呼ばれる。アウレンは、古典的モチーフこそ劇的で宗教的深みあるものとし、ラテン型を形式主義的なものと批判する。本稿では古典的モチーフを対悪魔勝利説、ラテン型を満足説、倫理型を主観説と呼ぶことにする。

(1) 対悪魔勝利説

ギリシャ教父たちは、対悪魔的観点から贖いを解釈した。オリゲネスは、我々が代価を支払って買い取られた¹⁴というパウロの言葉や、主イエスがご自分を贖いの代価として与えるために来た¹⁵と言われたことを根拠として、私たちが支配下におさめていたのは悪魔であり、私たちは自分の罪によって売り渡されたのであるから、悪魔は私たちの身代金としてキリストの血を要求したという。ギリシャ教父みな賠償の支払先を悪魔だと主張するわけではないが、共通点は、キリストは悪魔を征服して、その民を悪魔の圧制からご自分の支配へと移したとしている点である。

アウレンは、ルターの贖罪理解の中に悪魔に対する勝利という言説が含まれていることに注目し、古典的モチーフに分類したいようである。確かにルターは「キリストは悪魔を十字架につけ、死を殺し、罪を断罪し、律法を縛りたもうからである¹⁶。」と言い、賛美歌「神はわがやぐら(Ein feste Burg ist unser Gott)」でも悪魔を征服する万軍の主である神としてのキリストを描いている。

¹⁴ 1 コリント 6:20

¹⁵ マルコ 10:45

¹⁶ ルター『ガラテア書講義』(徳善義和訳、中央公論社、1969 年) 2:20

しかし、ルターは後に見るように刑罰代理説をも、この上なく明瞭に説いている。

対悪魔勝利説の問題点は、第一に、一部の教父が悪魔には神に身代金を要求する権利があると教え、キリストの命という身代金が悪魔に支払われたとすることである。レビ記とヘブル書が示すように、キリストの犠牲の予型であった動物犠牲が神に対してささげられたように、キリストの十字架の犠牲は神に対してささげられた。第二の問題点は、悪魔への責任転嫁によって人間が罪を自覚できなくなる危険である。神に追及されて、アダムの妻が蛇に責任転嫁をした時、悪魔はほくそ笑んだに違いない。アウグスティヌスは、かつてマニ教の迷妄の中にあったときのことを次のように告白している。「わたしは、当時もなお、罪を犯すのは、われわれ自身ではなく、われわれとは別の、何か知られぬ本性のものがわれわれにあって罪を犯すのだと考えていた。そして罪の責任を免れているということが、わたしの傲慢な心を満足させていた。(中略)そしてわたしは、自分を罪人であると考えていなかったの、その罪はますます救いがたいものであった¹⁷。」

(2) 満足説・刑罰代理説

キリストの賠償が神に対するものであるとしたのは、アンセルムスの『神はなぜ人となられたか』である。アンセルムスといえば、贖罪を賠償制度の枠で論じている所のみが取り上げられがちだが、実際には、彼の視野の中には悪魔も入っていた¹⁸。ただ、彼の悪魔に関する主張のポイントは、悪魔には神に賠償を求める権利はないとする点である。以下、満足説を概説してみる。

＜被造物の罪とは神に帰すべき従順を、神に帰さないことである。不従順な者は、神の栄誉を奪い侮辱している。不従順な者は罪ゆえに、神に対して負債がある。負債の返済がなくても、罰せず、慈悲のみで罪を赦すことは公正で秩序を保つ神にふさわしくないゆえに、神は罪を罰する。神の栄誉は罪の賠償に

よって回復され、神が満足することによって罪の赦しが与えられる。ところで、人間は罪の賠償をしなければならないが、神に対する罪はあまりに大きく、その力がない。罪の賠償をなしうるのは神のみである。だが神には賠償責任はなく、人間に責任がある。そこで、神の御子が受肉して人とならなければならなかった。キリストは死に至るまで神に完全に従順であることによって賠償責任を果たして神の栄誉を満足させた。キリストの十字架の死は、神に対する尊い贈り物である。神はこの贈り物に対して、報酬をキリストに与えようとするが、キリストは祝福に満ちた子なる神であって、報酬を受ける必要はない。そこで、神は罪の赦しの報酬をキリストでなく人間にお与えになった。＞

満足説の背景にはゲルマン封建制度の賠償思想やローマ教会の免償制度があるとして、満足説を文化現象に還元しようとする向きがあるが、旧約聖書の中に罪の償いの思想はある。洗礼者ヨハネはイエスを指さして「見よ、世の罪を取り除く神の子羊¹⁹。」と叫んだ。主イエスは過ぎ越しの子羊が犠牲とされる夕べを選んで最後の晩餐を行い、新しい契約を与えられた。過ぎ越し祭で神の民の罪を負った子羊は、主イエスの犠牲の予型であった。

アンセルムスの功績は、第一に、満足させる相手が悪魔でなく神であることを明らかにしたことにある。第二は、罪の本質を神への不従順、神に帰すべき栄誉を奪うこと、神に対する侮辱としてとらえた点である。改革者とその後継者は、基本的にアンセルムスの満足説を継承したが、「罪は律法への一致の欠け、神の律法にそむくこと²⁰」であるとして罪を具体化し、キリストの犠牲は神の律法の要求を満足させるものであるとした。これは刑罰代理説と呼ばれる。それで、一般に改革者たちはアンセルムスの満足説を改良し乗り越えたと言われるが、必ずしもそうとは言えまい。旧約の贖罪儀礼に用いられた動物は辱めを受けないのに、主イエスの処刑は何ゆえあれほど辱めに満ちたものでなければならなかったのか？アンセルムスは、罪とは神への侮辱であることを明確にした。神への侮辱は、個々の律法違反よりもはるかに重大である。もし個々の律法違反が建物の窓ガラスを割ることに譬えられるとすれば、神の権威に対する反逆

¹⁷ アウグスティヌス『告白』（服部栄次郎訳、岩波書店、1969年）5:10:18

¹⁸ 「神はなぜ人となられたか」第一巻6（『アンセルムス全集』古田暁訳、聖文社、1980年）を参照。

¹⁹ ヨハネ 1:29

²⁰ ウェストミンスター小教理問答書第14問答を参照。

は建物の土台を覆すことに譬えられる。罪を神への侮辱として理解するならば、キリストの死が十字架刑でなければならなかった理由を説明できよう。

満足説・刑罰代理説の弱点は、キリストの受難と義認の関係は明瞭に説明できるが、キリストの復活と義認の関係については必ずしも明確にできないことであろう。パウロの「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました²¹。」という表現は、罪の赦しをキリストの犠牲死と結び付け、義認を復活と結びつけて、義認は罪の赦しを含みつつ、より積極的な事柄であることを示唆している。

(3) 主観説

主観説は、＜神は愛であるから罪の代償・犠牲は必要ない。人間が神のもとに帰するために必要なのは、人間が己の罪を悔いる事だけである。人は、キリストの愛に感化されて、神への愛に生きるようになる。キリストを模範として愛に生きるその行動が、その人の贖いとなる＞と主張する。主観説を明確にしたのは、16世紀の反三位一体論者ソツツイーニである。J.I. パッカーが彼の満足説批判を次のように要約している。「ソツツイーニは、このキリストに対する身代わりの懲罰を非理性的、支離滅裂、不道德そして不可能と糾弾した。ソツツイーニの議論はこうである。赦しの授与は、要求に対する充足行為を行うことと一致しない。また罪ある者から罪無き者へと刑罰の対象を移すことも不公正である。また、一人の一時的な死は、多くの者の永遠の死の本当の身代わりとはなりえない。そして、完全な代理的充足というようなものが本当に存在するのだとしたら、そのようなものは必然的に、罪の中に無制限に生き続けてよいという許諾を私たちに与えるものとなる²²。」

ソツツイーニは、罪に対して犠牲を求めるような神は非理性的で支離滅裂で不道德だとする。今日に至るまでリベラルな神学者たちは同じ路線にある。カトリックの森一弘司祭は次のように発言している。「キリストの十字架を『犠

²¹ ローマ 4:25

²² J.I. パッカー『十字架は何を実現したのか—懲罰的代理の論理』（長島勝訳、いのちのことば社、2017年）10頁

牲』というかたちで説明するのは、先ほど申し上げた正義、交換の正義と言う視点が、聖アンセルムスとかトマス・アクィナスあたりで神学の中にどんと入ってきてしまった論理です。それがのちに主流になって今日までできてしまった。ところが、キリストの十字架を『犠牲』としてとらえてしまうと、神の姿が歪んでできてしまう。それは現代の神学者たちも指摘しているところです。（中略）ちなみに、福音書をずっと読んでみても、福音書の中にキリストの十字架を『犠牲』とする、あるいは罪のあがないとするような言葉は全く出てきません²³。」

だが、森司祭の主張に反して、福音書には、キリストの十字架の死を犠牲、罪の贖いとする文言がいくつもある。主イエスは言われた。「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」（マルコ 10:45）「これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。」（マタイ 26:28）また、洗礼者ヨハネはイエスを指して言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」（ヨハネ 1:29）また書簡では、ヘブル書はレビ記の贖罪犠牲の律法を背景として、御子イエスの死が贖罪のための犠牲死であったと語っている。パウロもペテロもヨハネも同様である。「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」（ローマ 4:25）「ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」（1ペテロ 1:18,19）「この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」（1ヨハネ 2:2）「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」（1ヨハネ 4:10）

関連して森司祭は、「キリストの十字架を生贄とか犠牲としてとらえると、神理解が色々歪んでできてしまう」と主張するが、それは言い換えれば、「罪の賠償のために犠牲を要求するような聖書の神観はゆがんでいる」ということで

²³ 高橋哲哉・菱木政晴・森一弘『殉教と殉国と信仰と』（白澤社発行・現代書館、2010年）98,99頁

ある。彼の理想とする神とは、罪の代償を求めない無限抱擁的な汎神論の神なのであろう。だが、それは聖書にご自身を啓示された神ではない。

2. 義認についての理解

(1) 刑罰代理説と義認

プロテスタントの伝統的義認理解と緊密に結びついているのは、刑罰代理説である。ルターはガラテヤ書3章13節の解説で、キリストの刑罰代理をこの上なく明確に説いている。

『キリストはわれわれのために呪い（呪われる者）となって、われわれを律法の呪いから救い出したもうた。それは「木にかかる者はみな呪われる」と書かれているとおりである』(中略)パウロは彼の言葉を立派に守って、正確に語った。(中略)つまり、キリストは自分のせいで呪いとなったのではなくて、『我々のために』呪いとなったと彼は言っている。だから、『われわれのために』という表現に強調点がある。なぜならキリストは、御自身の人格に関しては、罪なきかたであるからである。だから、木にかけられる必要はない。しかし、すべての盗賊は、律法によれば木にかけられねばならないのだから、キリストご自身もモーセの律法に従って木にかけられねばならなかった。それはキリストが一人の罪人や盗賊でなく、すべての罪人と盗賊をわが身に引き受けたもうたからである。われわれは罪人であり、盗賊であって、われわれこそ死と永遠の滅びとにふさわしい者である。ところがキリストは、みずからわれわれのすべての罪を引き受け、そのために十字架で死にたもうた。(中略)要するに、すべての人のすべての罪をご自分の身に負いたもうわけである。それは、キリストがそれらの罪を犯したというのではなくて、われわれが犯した罪をわが身に引き受け、ご自分の血をもってそれに対して償いを果たそうとされてのことである²⁴。』

キリストがご自分の血をもってわれわれの罪の償いを果たしてくださったの

²⁴ ルター「ガラテヤ書講義」(『中公世界の名著 ルター』徳善義和訳、中央公論社、1969年)499-505頁抜粋。

で、もはやわれわれが自分の善き業によって償いをすることはありえず、ただキリストを信じて義とされるのである。

「キリストが真に神の小羊であって、世の罪をとりぞぎ、われわれのために呪いとなられて、われわれの罪を着たもうたのであれば、必然的な結論として出てくるのは、われわれが愛によつては、義とされることも罪をとりぞぐこともできないということである。なぜなら、神はわれわれの罪をわれわれにではなく、み子キリストに課したもうたからである。罪がキリストによつてとりぞかれるのだとすれば、われわれによつてはとりぞかれえない。聖書全体がこのことを語っており、われわれも信条において同じことを告白し、祈って、『わたしはわたしたちのために苦しみ、十字架につけられ、死にたもうたみ子イエス・キリストを信じます』と言うわけである²⁵。』

ルター派のアウグスブルク信仰告白は、第4条「義とせられることについて」で次のように告白する。「また、われらの諸教会はかく教える。人は自分の力、功績、或は、業によつて神の前に義とせられることは出来ず、キリストのゆえに、信仰によつて、代償なく、神の恩恵により義とせられる。その時、人々は恩恵の中に受け入れられ、その死によつてわれらの罪のために贖となり給うたキリストのゆえに、その罪が赦されることを信ず。この信仰を神は御前に義と認め給うのである(ローマ3章、4章)²⁶。』

また、改革派のウェストミンスター小教理問答の問答33には次のようにある。

「問33 義認とは、何ですか。

答 義認とは、神の一方的恵みによる決定です。それによつて神は、私たちのすべての罪をゆるし、私たちを御前に正しいと受けいれてくださいます。それはただ、私たちに転嫁され信仰によつてだけ受けとるキリストの義のゆえです²⁷。』

両信仰告白の表現は違うが、内容的にはほぼ同じである。すなわち、義認とは、

²⁵ ルター同上

²⁶ 『信条集 前篇』(新教出版社、1955年)21頁

²⁷ 『ウェストミンスター小教理問答書』(榊原康夫訳、聖恵授産所出版部、1981年)

①人間の功績によらず神の恵みによって、②われらの罪のために贖いとなられたキリストのゆえに、あるいは、キリストの義を転嫁されて、③神の御前に罪を赦され、正しいと受け入れられることを意味する。両者の違いはアウグスブルクが十字架でわれらの罪を償ったことのみを告白しているのに対して、ウェストミンスターの特徴は「キリストの義」を「キリストの服従と償い」、すなわち、積極的服従と消極的服従の両面から告白している点である²⁸。しかし、いずれもキリストの代理的わざを義認の根拠としている点では一致している。

(2) E.P. サンダースとN.T. ライトの「義認」解釈

ところが、E.P. サンダースとN.T. ライトは、義認に関する新解釈を提案している。

① E.P. サンダースの「義認」解釈

第一に、サンダースはR. ブルトマンが1世紀のユダヤ教が「悔い改めも、贖いも、罪の赦しもない宗教だ」としたのに対して、実際のユダヤ教は契約規範主義（神の契約において選ばれた者として律法を規範として守るという考え方）であったとする。そして、福音書に見える形式主義的で偽善的な律法学者・パリサイ派の姿は、福音書記者による戯画化であって、当時のユダヤ教徒の現実とかけ離れているとする。

第二に、サンダースは、パウロの「義認」は『正しい者と正しいものとみなす』こと、つまり、罪責のない者を潔白であると考え、あるいはそう宣言することという普通の意味²⁹でなく、「変えられ」「移され」て「キリストと一つにされ」「新しく造られたもの」の一部となったという意味だと主張する³⁰。その根拠は、パウロはローマ書6章7節で δικαιίω をこの通常の枠を超えて「解放する」という意味で用いていることである。パウロ自身、類似の文脈のローマ書6章18節では「解放する ἐλευθερώω」ということばを用いている。なんとサンダースはこのローマ書6章7節の δικαιίω の唯一の例外的用法から敷衍して、パ

²⁸ ウェストミンスター信仰告白 11:1

²⁹ E.P. サンダース『パウロ』（土岐健治・太田修司訳、教文館、2002年）96頁参照。

³⁰ サンダース同上 98頁

ウロにおいてはすべて「義とされる」ということばは、「移されてキリストと一つにされた」（ガラテヤ3:8）という意味で用いているとしている³¹。サンダースは、イエスの死を義認の根拠とする刑罰代理の記述が、パウロ書簡の1コリント書15章3節、ローマ書3章21-25節、ローマ書5章9,18節、ガラテヤ書3章13節、2コリント書5章21節にある事実を悉く認める³²が、「イエスの死を犠牲ととる解釈はパウロの思考の中心にはない³³。」と述べて、「彼の思想の核心は別の観念群、つまり、キリストへの参与と、＜罪＞への隷属から＜霊＞にある生の状態への変化にある³⁴。」と主張する。

第三に、サンダースは、パウロが「私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、『異邦人のような罪人』ではありません。」（ガラテヤ2:15）「律法による義については非難されるところがない者でした。」（ピリピ3:6）と言っているように、キリストを信じる以前も自分は罪人であると考えてはいなかったから、パウロにおいて「義とされる」というのは、神の御前で「罪を赦され正しいと受け入れられる」という意味であるはずがなく、「最後の審判で自分を告発するような否定的要素を考えることはできなかった³⁵。」と主張する³⁶。

第四に、サンダースいわく、ガラテヤ書の「論争の主題は、『個人はいかにして神の目の前に義たりうるか』ではなく、むしろ『異邦人は何を根拠にして終わりのときに神の民に加わることができるか』というものであった³⁷。」「『信仰によって義とされる』ことは『滅びるはずのグループから救われるはずのグループへと移される』ことを意味する³⁸。」「パウロは、異邦人に対する神の要求は、イスラエルの神を受け入れることとイエスを救い主として受け入れることのみであると論じた。彼の立場の積極的な表現は『信仰によって義とされる』、

³¹ サンダース同上 98頁

³² サンダース同上 159,160頁参照。

³³ サンダース同上 160頁

³⁴ サンダース同上 163頁

³⁵ サンダース同上 99頁

³⁶ サンダース同上 98,99頁参照。

³⁷ サンダース同上 101頁

³⁸ サンダース同上 155頁